加藤安彦先生を偲んで

お別れの言葉

鎌田英明●会長

昨年11月、加藤安彦先生の突然の訃報に接し驚きました。それ以前にご入院されたことはお聞きしておりましたが、お元気と伺っており、少し落ち着かれたらお見舞いをと思っておりましたので、早速にお伺いしなかったことを悔やみました。ここに神奈川県皮膚科医会を代表して、神皮における加藤先生のご功績のほんの一部ではございますが、私の知るところをご紹介させていただきお別れの言葉に添えさせていただきたいと存じます。

昨年７月に開催されました本医会の50周年を祝う記念式典の場におきまして、実に創設以来50年間会員をお続けの先生方に、畏敬の念も込めまして記念品をお贈りさせていただきました。加藤安彦先生は言うまでもなく、その中のお一人であられ、代表としてご挨拶をいただきました。

昭和61年に発刊された20周年記念誌をひもときますと、加藤先生と医会の関わりは、その前身である神奈川県皮膚科懇談会が昭和35年に創設される際に、準備段階から若手の中心人物のお一人として奔走されたところから始まり、昭和34年11月に箱根奈良屋で行われた発起人会に大森周三郎先生（警友病院）、野口義圀横浜市立大学教授、安西喬先生（関東労災病院）ら当時のお歴々と共に参加されていたことが記載されています。そういう意味で加藤先生と神皮の関わりは50年にとどまらず、60年近いものであったことが分かります。

その後、昭和41年に現在の形である神奈川県医学会の分科会として、中野政男先生や、安西喬先生らと共に改めて当医会の設立に寄与されました。

その後も医会と共に歩まれ、昭和58年から平成４年まで幹事長をお務めになられ、さらに平成４年から平成12年まで会長をお務めになられました。

50年継続会員記念品贈呈式でご挨拶される加藤先生

記念品贈呈式でのお姿。金丸三包先生（左）、新関寛二先生（中央）とご一緒に

その間に、現在の医会にも引き継がれている各種委員会の整備に加えて、時代に即した医会活動のため新しい委員会も創設されました。平成５年には、近隣医会に先駆けて会報「神皮」を創刊されるなど、まさに医会とともに歩んでこられ、いろいろな面で医会の牽引役を担ってくださいました。会長御退任後も例会、勉強会にはほぼ毎回ご出席くださり、我々後輩に温かく、勇気づけられるお言葉を賜ったことは忘れられません。

さらに保険審査の分野では長らく社会保険支払基金の審査員をお続けになられ、日臨皮でも創設時か

ら健保委員をお務めになられました。現在でも審査員のバイブルともいえる「加藤マニュアル」を作成され、その緻密に各項目を網羅したマニュアルの存在により、審査の平準化に大きく貢献されました。

また、先生は日臨皮の活動にも深く関与され、昭和63年から平成４年まで、南関東山静支部長をお務めになられました。また、平成７年の第11回日臨皮総会・学術大会（横浜にて開催）では会頭をお務めになられ成功裡に会を運営されました。

これまでの先生のご努力を無にしないように、我々後輩も微力ではございますが今後益々神皮、日臨皮を発展させるべく努力して参る所存でおります。

加藤安彦先生、永い間お疲れ様でございました。どうぞゆっくりお休みください。

合掌。

加藤安彦先生を偲ぶ

＊

毛利　忍●元横浜市立市民病院皮膚科部長

本学皮膚科学教室大先輩の加藤安彦先生が平成28年11月８日にご逝去されました（享年89歳）。

先生は天寿を全うされるまで働き続け、永眠されました。私も入局してすぐから大変お世話になった先生を偲び、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

先生は昭和25（1950）年、横浜医学専門学校を卒業されました。横浜市立大学皮膚科泌尿器科教室に入局され、今日の隆盛の基盤を築かれました。学問的にはチメロサールの抗真菌作用を発見され、国の研究班により抗真菌薬開発の際の効果判定基準薬とされたことは、特筆すべきことと思います。その頃は野口教授が初代教授でしたが、少ない教室員が診療と研究に徹夜で頑張ったと聞いております。平成17年より介護老人保健施設「ひとりざわ」の施設長に就任、平成28年９月１日、脳梗塞で倒れて脳血管センターに入院される前日まで仕事をなさっておられました。

先生は大変勉強熱心で几帳面であり、日本皮膚科学会総会･日本臨床皮膚科医会総会は言うに及ばず、神奈川県皮膚科医会例会、横浜市皮膚科医会例会、神奈川医真菌研究会、大学の症例検討会などの勉強会には必ず出席され、ノートを取っておられました。ひとりざわの施設長になられた時は、「ご高齢の方を沢山お預かりしているので、内科も見られないと困るから、心電図を復習している」と仰っておられ、さすがは加藤先生だと感嘆いたしました。ご逝去の後、ご自宅に伺う機会がありましたが、学会のプログラムなどはきちんとファイルされてずらっと棚に整理されており、何と医師国家試験受験票まであったのには驚きました。

私は入局後すぐ、週１回のアルバイトで市民病院に派遣されました。その頃はまだ建てなおす前の病院で、白いカーテンで区切られたブースで診療し、午前中の診療が午後３時頃までかかることがよくありました。その忙しい中でも、珍しい症例がくると、「ちょっと来なさい」と見せて戴き、診断がわかればそれでよく、わからない時は丁寧に説明していただきました。疥癬や臀部肉芽腫などが記憶に鮮明です。その他、診療技術や患者説明などに関しても色々教えを受けました。

大変努力家でもあり、心房粗動で入院してカテーテル検査をした後に、腸腰筋膿瘍を起こし長く入院された時も、根気強くリハビリをして復帰なさいました。お若いころから長く続けられたテニスで鍛えられた体力がものをいったのだと思います。

こういうと、仕事だけに凝り固まった先生を想像されるかもしれませんが、それ以外の時は温厚で諧謔を弄し、紳士的であり、私は市民病院で長く加藤先生の下で働きましたが、パワハラなどは一切ありませんでした。金沢市に10年おり、その時の経験や、他の女医先生のいろいろな悩みを聞いていたので、市民病院に行った時は頭の上が晴れた思いでした。その代わり、病院長からはパワハラを受けましたが、

これは内緒です。

また大変お酒が強く、私も少々嗜みますので、飲み会などでは隣に座らせて戴き、いろいろなお話を聞くことができました。話題は多岐にわたり、終戦直後のまだ赤線があった時代に検診をしたころの挿話や、酒席でのお流れ頂戴の作法やら、珍しい話をたくさん聞くことができました。

平成28年７月23日には加藤先生の米寿の会をホテルニューグランドで執り行いました。先生は謙虚な方ですので、「わざわざそんな会をしなくてもよい」と仰られたのですが、同窓会・門下生としてはぜひやりたく思い、先生に無理を言って出席していただいたわけです。結果として「やっておいてよかった！」と思いました。９月に入院なさった時、お見舞いに参上すると、右麻痺がありましたがお元気で、言語障害は殆どなく、脳幹梗塞と聞いていましたがこれなら大丈夫かもと思いました。しかし11月になり呼吸不全で急逝されました。先生は長生きの家系ですのであと10年くらいはと思っていましたが、このような結果になり大変残念です。加藤先生の弟子の端くれとして、先生のような診療を目指してまだまだ研鑽を積みたい、また若い方たちにもそれを伝えたいと思っております。

加藤先生、長い間お疲れ様でした。ご指導のほど誠にありがとうございました。天国でゆっくりとお休みください。合掌。

■加藤安彦先生　ご経歴

昭和25年　横浜医学専門学校卒業
昭和26年５月　横浜市立大学皮膚科泌尿器科入局
昭和33年５月　小田原市立病院皮膚泌尿器科医長
昭和46年４月　横浜市立市民病院皮膚科部長
平成３年６月　横浜市立市民病院院長
平成５年６月　横浜市立小児アレルギーセンター所長
平成11年３月　同退職
平成17年４月　老健ひとりざわ所長

昭和58年７月～平成４年12月　神奈川県皮膚科医会幹事長
昭和59年～昭和63年　日本臨床皮膚科医学会健保委員
昭和63年～平成４年　日本臨床皮膚科医学会南関東山静支部長
平成４年12月～平成11年７月　神奈川県皮膚科医会会長
平成７年６月　第11回日本臨床皮膚科医学会会頭